西批杷島町史

「庄内川の花見」の話から、枇杷島という土地にも関心がわいてきた。名大中央図書館「地方史コーナー」に、1964年刊行の西枇杷島町史があり、ざっと目をとおした。現在は清須市となった西枇杷島町の歴史の一端が分かってきた。

西批杷島町は、濃尾平野の中央やや東南よりに位置する。名古屋市に隣接し、面積は約3平方キロ、人口は約1万8千人、明治22年（1889）に、下小田井村と小場塚新田村が合併して発足した町である。

下小田井村が、明治以後の西批杷島町の性格と繁栄の基礎を固めたのは、江戸時代初期、徳川義直の時に、尾張の政治・経済の本拠が、清須から名古屋に移され（1610 年頃）、下小田井が占める地理的位置の重要性が、急激に高められたからである。新城下の名古屋と、領内の要地一宮・甚目寺・津島・岩倉・犬山、さらには岐阜をむすぶために、庄内川に橋をかけるとすれば、地形上、枇杷島村（東枇杷島町）と下小田井村との間をおいてほかにない。枇杷島橋の架設は元和8年（1622）といわれるが、これによって、清須を起点として大垣に至り、さらに垂井から京都に通ずる美濃路が、名古屋まで延長された。下小田井村は、交通の要地として、その存在価値を高めたのである。橋の架設によって、下小田井村は、濃尾平野の農村生産地帯と、消費都市名古屋との連結地点として最適な場所となった。そこに青物市場が開設され、農産物集積地として重要な使命をになうに至った。街道筋と市場を中核とする、商業の町の基礎ができたのである。青物市場は、枇杷島橋の架設とほぼ時を同じくして開設され、六軒の青物問屋で出発した。

多くの変遷をたどってきたが、市場死活の問題となったのが、名古屋中央卸売市場の開設であった。昭和 24 年（1949）に至って、熱田川並に名古屋中央卸売市場が設立された。民営の枇杷島市場が存在することは、中央卸売市場の存在理由を半減させる。そこで、これを吸収する目的で、25 年に中央卸売市場北分場（枇杷島市場と改称）設置が決定された。30 年、ついに枇杷島名古屋青果株式会社はここに移転し、約 350 年の歴史をもつ西批杷島の市場は、その名前を残して、町から姿を消したのである。

市場の移転は、市場とともに発展した当町にとって、大きな打撃であった。しかし、町は、工業化によって市場移転の空白をうずめ、新しい発展の道を力強くふみ出した。

（2017 年 5 月 5 日）